

ISAPH

アイサップ
ニュースレター

第34号

News Letter

2019年11月30日発行



写真: マラウイ 調理実習後の試食にて

ISAPHはラオスとマラウイの母親と
子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health





AINプログラム： 村落栄養ボランティア育成と 食用昆虫実用化への挑戦

ISAPHラオス 野田 幸枝

ラオス事務所では2017年4月から3年の計画で、公益財団法人味の素ファンデーションによるAINプログラムにご支援いただき、農村部食生活改善プロジェクトを実施しています。その内容は、プロジェクトサイト対象3村において、子どもの栄養改善のために、①村落栄養ボランティアを育成し、村での子どもの栄養にかかる知識の向上に努め、②栄養・生活の向上を目指して、「食用昆虫」の実用化検証（実証実験）を行うというものです。

村落栄養ボランティアの第1期生は2018年10月に研修プログラムを修了しており、第2期生も2019年11月で研修プログラムを修了する見込みです。「食用昆虫」の実用化の検証においては、2018年6月からNPO法人食用昆虫科学研究会の佐伯真二郎氏をラオスに長期派遣しており、同年末には村落栄養ボランティアの中から選定された5世帯のパイロット世帯がゾウムシの養殖に成功するに至りました。2019年5月には、パイロット世帯がゾウムシの養殖に必要なキャッサバを植える農地開墾を開始し、キャッサバの自給を目指しています。

プロジェクトは約2年半が経過し、終盤を迎えたわけですが、味の素ファンデーションのシニアアドバイザーの栗脇様とビデオグラファーの高松様による視察を受け入れました。初日、プロジェクトサイトへ出発する前に、カムアン県保健局を表敬訪問しました。トーラカン局長は、プロジェクトサイトであるサイブートン郡について、洪水や日照りで米がとれない地域があったという食糧生産事情について述べ、貧困地域におい

て、子どもの栄養改善や食料の安定供給を目標とした本プロジェクトは意義が大きいものとし、称賛の意を述べられました。

2日目は、村でのアウトリーチ活動の様子を視察していただきました。子どもを連れた住民が村の集会場に集まり、保健局の職員による成長モニタリングを受ける傍ら、村落栄養ボランティアのメンバーが離乳食の調理実演をしています。アウトリーチ活動の現場は、村落栄養ボランティアが研修で学んだ知識を住民に伝える場でもあるのです。当日の離乳食は、卵と肉、ニンジン、カボチャ、空心菜等が細かく刻まれた、彩り豊かなお粥でした。離乳食を配布した後は、栄養素の種類やバランスの良い食事の重要性についての栄養教育を実施しました。

アウトリーチ活動の後はゾウムシ養殖のパイロット世帯を訪問し、住居の一角に設置され養殖場とキャッサバ農地をご覧いただきました。ゾウムシの養殖は全パイロット世帯が成功を収めており、養殖規模拡大への期待が高いといえます。しかし一方で、多くの住民に養殖技術を広めるためには、需要に見合ったキャッサバを確保することが課題であるという現状をお伝えしました。

ラオス事務所では、子どもの栄養状況が改善されることを目標とし、プロジェクトの効果が継続できるよう、これからも活動を続けてまいりたいと思います。



朝市を訪問



村落栄養ボランティアによる栄養教育の視察



キャッサバ農地の視察

National Health Research Forumの参加について

ISAPHラオス 登 圭 紀

ラオスの首都、ビエンチャンで行われた第13回 National Health Research Forum (NHRF) に参加してきました。今年はISAPHが2016年から2018年の3年間実施したプロジェクトの活動報告が口頭発表に採択され、ISAPHの活動はもとより、現地のパートナーである県保健局や郡保健局の成果がNHRF参加者である国内外の研究者等へアピールできる大変貴重な機会となりました。

口頭発表は県保健局のカウンターパートであるカムパナーワン医師に依頼しました。最初は「英語は得意ではないし、まずは発表資料を見てからできそうであれば……」とあまり積極的な答えではなく、発表を引き受けてくれるか心配をしていました。そんな中始まった発表の準備でしたが、カムパナーワン医師が伝えたいメッセージがきちんと発表内容に織り込めるように相談をし、一緒に準備を進めることができました。最終的には発表者を引き受けていただくことができ、発表原稿の読み合わせや発表の練習を一緒に行い発表当日を迎えました。

発表ではプロジェクトを実施した3年間で改善した施設分娩率や産前健診率についてと、残された問題として子どもの栄養状態の改善があるという報告をするとともに、ISAPHが郡保健局と行っている活動を知ってもらえるように、実際の活動の様子などの紹介も盛り込みました。発表後の質疑応答では、普段は聞くことができないプロジェクト関係者以外の方からフィードバックがいただけるのも、今回NHRFに参加させていただいたからこそだと、とてもありがたく感じました。そして、今回NHRFへお招きしたカウンターパートと、通訳として同行したISAPHラオス事務所の職

員から感想をいただきましたのでご紹介いたします。

県保健局カムパナーワン医師より「NHRFはラオスで活動するNGO、NPOや研究者などが発表や議論ができる場なので、可能な限り毎年参加した方がよいでしょう。参加が難しくても、せめてポスターの提出などはしてほしいと思います。郡保健局のスタッフにとっても、参加することで郡の問題を解決する手がかりや刺激を受ける良い機会となるとと思います。また、英語が必要な機会に英語が使えるように、もっと学びたいと強く思いました」

郡保健局ニポップ氏より「ラオス国内では母子保健に関わる活動が様々な団体によって行われています。NHRFではその活動や経験を互いに共有し学ぶことで、自分たちの活動に生かすことができるとも重要な機会であるため、毎年参加できるとよいと思います。また、今回参加することで自分自身の英語の勉強にもなりました」

ISAPHラオス事務所のコンサワン職員より「自分が経験を積めるように通訳として同行させていただいたことを理解しています。こういった学術集会に参加するのは初めてで、今回の出張では本当に新しいことばかりで、これからもっともっと精進しなければと気付かされました。今回はNHRFに同行する機会をいただきまして、ありがとうございました」



会場一緒になったサイブートン郡の元保健局長ソンブン医師と一緒に



発表の様子



発表を終えて記念撮影



プロジェクトの進捗を確認する

ISAPH マラウイ 山本 作真

マラウイで2018年5月から実施している母子の栄養改善プロジェクトも中盤に差し掛かり、中間評価を控えて活動の現状の把握、今後の展開に向けた見直しの時期になりました。

2019年8月16日から26日にかけて、疫学が専門でISAPH顧問の松葉剛先生、ならびに国際栄養学が専門で長野県立大学准教授の草間かおる先生をマラウイに派遣し、プロジェクトの進捗確認と今後の活動についてご指導いただきました。また、プロジェクトの達成度合いを数値的に評価する方法や、その目標設定についても、改めて検討しました。

松葉先生とは、プロジェクト進捗の確認とモニタリング手法、例えば対象地域で低体重児を持つ世帯を家庭訪問した際のデータを分析する方法について、改めて現場で検討しました。同じく草間先生には、前回の派遣からこの1年間で、活動地域の栄養問題がプロジェクトの活動によりどのように変わりつつあるかを確認していただき、現地の環境を踏まえて今後の活動の方向性やレシピについて示唆していただきました。

お二人には、現地でISAPHマラウイが実施している活動内容を一通り視察していただき、プロジェクト全体でその活動の果たす役割と期待される効果、その測定方法などについて、現地の職員を交えて検討しました。

プロジェクトの対象地域で実際に母親やその他の保護者に対して栄養指導を行うのは、ISAPHから指導を受けた集落ごとのリーダーになります。そのため、視察の始めにリーダーらが使用する保健教材の読み合わせや、実際に母親ら保護者への読み聞かせを行う活動を視察しました。読み聞かせで伝えられる情報の質や話題への興味関心の強さは話者の実力に依存してし



ISAPH マラウイの現地職員と活動状況について情報交換

まうため、例えばリーダー向けに関心を引く話し方を紹介した映像教材を作成すること、あるいは知識の定着には一対一の講話に拘らず、数名での寸劇や多人数での対話形式にしても良いのでは、などのアイデアが提示されました。

続けて、集落のグループで運営している菜園と養鶏を視察し、これまでマラウイの農村では全く栽培・消費されることがなかったニンジンやニンニクといった食材の栽培や、動物性タンパク質がほとんど摂取されていない現状を改善すべく導入した養鶏の現状を確認しました。これらは対象者たちの栄養源として期待されるだけでなく、他の食材を購入する収入源ともなります。

このグループ菜園で栽培された、これまでマラウイの農村で全く食べられていなかった食材は、集落ごとにグループで実施している調理講習会で活用されます。この調理講習会の活動にも参加し様子を把握しました。日本では離乳食として食材をすりおろしたものを幼児に与えることが一般的ですが、マラウイにはこれまで穀類をお粥にする以外に幼児向けに食材を加工する習慣が全くなく、食材だけでなく調理方法についても効果的な方法を導入したいとの意見が挙げられました。また、実際に各家庭で導入に至るためには調理者のみならず家庭内で発言権を持つ層に対してもコミュニケーションを図る必要があるだろうとの指摘を受けました。

地域の保健施設が毎月実施している発育状況を確認する乳幼児健診の視察では、一口に低栄養と言っても原因は様々で、発育状況の時系列変化からパターンを分類してどの様にアプローチすべきか、ご指導いただきました。例えば離乳食を始める時期から体重が伸び悩む場合、疾病による消耗、出生時からの先天的な場合など、事由によってそれぞれ対応策は異なります。

この乳幼児健診自体も、身長体重の測定や予防接種



グループ菜園の活動状況を視察

に参加する母子が200名前後と多数なのに対して地域保健員が3・4名と少なく、オペレーションの煩雑さで同保健員らが本来の業務に専念できておらず、また、参加者の待ち時間も長くなってしまふなど流れを見直す必要があるとの指摘を受けました。同時に、これだけ多数の対象者が毎月集まってくれる機会があるのであれば、前述した調理講習会で習得した食品を販売してレシピを紹介するなどの有効活用ができるのではないかとアイデアが出されました。

この乳幼児健診で発見された低体重児を持つ家庭に対し、ISAPHと地域の保健員とで協力して家庭訪問を実施しています。2019年に入って活動対象地域を拡大したことに伴い、低体重に該当する対象者も増え、限られたISAPHの人材で効果的に支援を必要とする対象を絞り込み運営する指針、あるいは介入前後でどの様に効果が表れたか客観的に測定する方法について意見を交換しました。

また今回、早稲田大学人間科学部健康福祉科学科4年生の溝下遼太郎さんが両専門家とマラウイに同行し、プロジェクト活動を見学しました。溝下さんは、国際協力に関する職業に将来は進みたいという希望があり、国際協力の現場を経験したいということから、プロジェクトの見学をされました。

松葉先生と溝下さんは簡易的な社会調査の手法を用いて、プロジェクト対象地域で人々がどのような情報源から保健に関する情報を得ているのか、ISAPHの現地職員と協力してデータの収集、分析を実施しました。結果、対象者の性別や年齢、学歴などによって差異はあるものの、概して現地の保健員やISAPHなどのNPO/NGOが最も信頼されている情報源であること、村落ではTVや配布物よりもラジオの影響力が強いことなどが明らかになりました。これらは今後の活動展開の参考になります。

これらの視察や調査を踏まえて、現地事務所では早速取り組みを開始しています。例えば、現地の食料事



集落のリーダーによる栄養教育の様子を視察



今回同行した早稲田大学4年生の溝下さんと、活動地域で出会った子どもたち

情の実態から不足する栄養素を摂取すべく加工食品を導入する計画、乳幼児健診で調理講習の成果物販売に向けた打ち合わせ、ラジオ番組の製作を目指した地域のFM局との検討などがあります。今回賜った知見を元に、活動をより効果的なものに展開していけたらと思います。



低体重児を持つ家庭訪問の際、対象児童の疾患を確認する松葉剛先生

グローバルフェスタ JAPAN 2019 外務省写真展で「優秀賞」を受賞！

ISAPH事務局 佐藤 優

みなさんは、グローバルフェスタ JAPAN に行かれたことはありますか？ グローバルフェスタ JAPAN は、国際協力の現状や必要性などについてたくさんの人に知ってもらうことを目的として、官民が協力して開催している国内最大級の国際協力イベントといわれています。国際協力に携わる多くの団体(NGO、国際機関、企業など)による展示や活動報告があり、ISAPHも国際保健医療協力を実施する団体の一つとして、いろいろな形で参加しています。今年は、9月28日・29日の日程で、29回目となるグローバルフェスタ JAPAN 2019 がお台場センタープロムナードで執り行われました。

そして、なんと。この大きなイベントの写真展「エールよとどけ!」において、ISAPH が応募した写真が優秀賞に選ばれました!!

優秀賞に選ばれたこの写真は、ラオスでの母子保健活動の一画面で、村の母親に子どもの成長について話をしている様子を写したものです。この活動は地道ですが、母親が子どもの成長と食事を結びつけるきっかけとなるため、子どもの栄養改善にとってとても重要です。ですから、この写真が「優秀賞」をいただいたことは、ただ魅力的な写真が撮れたということだけでなく、私



優秀賞「今月も大きくなったかな」

たちが一番大切にしている活動を多くの人に知っていただく機会ができたという意味で、本当に嬉しく思いました。この他にも、ラオスとマラウイの活動の写真をいくつか応募したところ、展示作品に選出され写真展のブースに展示されました。これからも、グローバルフェスタ JAPAN の写真展に応募していきますので、どうぞ来年も ISAPH の活動写真を見に来てくださいね。



展示作品「伸びたね」



展示作品「健康は私の手中」



展示作品「グループ菜園から栄養改善を」



展示作品「小さくても力強い命」



展示作品「思わず笑顔になる食事」



表彰式の様子

退任の挨拶

ISAPH事務局 磯 東一郎

2019年9月末日をもちまして、ISAPH事務局長を退任しました。

2007年4月の着任以来、多くの皆さまに温かいご支援、ご協力を賜り、誠にありがとうございました。それまで国際協力の現場で20年以上技術協力に携わっていましたが、NPOの運営管理経験は全くなく、試行錯誤の連続でした。思い返せば、ラオス・マラウイでの母子保健プロジェクトの立ち上げからここまで、直面した種々の課題を暗中模索しながらも職員とともに乗り越えることができたのは、ISAPHの活動にご賛同いただき、たゆまぬご協力をくださった支援者の皆さまと、現地で共に働いたカウンターパートや活動地域の住民の皆さまからいただいた有形無形の支えがあったからこそと痛感しております。この12年もの間、多くの感動と喜びを与えてくださった皆さまに、この場を借りて心からお礼を申し上げます。

今後は、ラオス事務所長として現地の活動を牽引してきた佐藤優が事務局長を受け継ぎます。ISAPHは、

地域住民が健康的な生活ができるための仕組み作りを目指して活動に取り組んでいます。その仕組み作りの基礎となるのは、現地の人々との信頼関係です。新たな体制の中で、現地の人々に寄り添う姿勢を貫きながら、ご支援いただいている皆さまの期待に応えてくれることを確信しています。

今後とも変わらぬご支援、ご協力をお願い申し上げます。



ラオスの子どもたちと

温故知新

～新事務局長として就任します～

ISAPH事務局 佐藤 優

NPO法人ISAPHは、2004年に誕生して、これまで多くの職員・専門家・ボランティア・インターンなどの力を借りることで活動を続けてくることができました。ラオスおよびマラウイの住民や政府から感謝をされる活動ができたのは、聖マリア病院の後ろ盾だけでなく、人と人が有機的に繋がって一つの目標に向かって走ることができたからに他なりません。この度、事務局長として新しい時代のISAPHの運営に携わっていきますが、これまでの諸先輩方が培ってきたネットワークを引き継いで、これからも「良い活動」ができるように取り組んでいきたいと考えています。

このような国際協力に対する想いは変えずに受け継ぐ一方で、私がISAPHに来た2016年から、変わっていくものもたくさんあることに気づかされます。2016年以降、SDGs（持続的な開発目標）が叫ばれるようになって、企業・大学・行政・NPO/NGOなど多くの機関が、国際協力や持続的な社会開発に関心を持つようになってきました。社会は常に動いていて、新しい発見が増え、技術は日進月歩で開発され、次々

に生まれてくるアイデアをどのように現場に活かしていくか考えていく必要があります。受け身の姿勢では、「良い活動」ができないのだと、人や社会の動きをみて、そう思います。つまり、これまでの国際協力にかける熱い想いと人とのつながりは大切にしつつ、新しいことにチャレンジしていく姿勢が、次の事務局長として担っていくべき役目なのかと思っています。

「温故知新」このテーマを掲げ、ISAPHをさらに大きく、より社会の発展、途上国の保健医療の向上に貢献できる団体となるようにこれから頑張っていきますので、皆さまどうぞよろしく願いいたします。



現地の人の笑顔と共に歩む

最近のできごと 2019年6月～2019年9月

- 6月4日 【ラオス】 AINプログラム:第5回 VNV (2期生) フォローアップ研修を実施
- 6月10日・11日 【マラウイ】 プロジェクト対象地域の地域指導者らを対象に ISAPHの活動について講習会を実施
- 6月17日～27日 【マラウイ】新たに活動を開始した地域で世帯リーダーらを対象としたケアグループ運営・衛生・戸別訪問型指導方法のトレーニングを実施
- 6月21日 【ラオス】 MOU 3年活動報告会を開催
- 6月28日 【ラオス】 AINプログラム:第6回 VNV (2期生) フォローアップ研修を実施
- 7月9日 【ラオス】 3カ月定期活動会議を開催
- 7月9日・10日 【マラウイ】 新たな活動対象地域の地域指導者らを対象に ISAPHの活動について講習会を実施
- 7月13日 日本国際保健医療学会第34回東日本地方会(青森)に参加、ラオスにおける栄養調査の結果について発表
- 7月17日～25日 【マラウイ】新たに活動を開始した地域で世帯リーダーらを対象としたグループ菜園・養鶏のトレーニングを実施
- 7月18日～8月5日 【ラオス】 ISAPH事務局の木村江里子をラオスに派遣
- 8月2日 【ラオス】 AINプログラム:第7回 VNV (2期生) フォローアップ研修を実施
- 8月16日～26日 【マラウイ】 ISAPH顧問の松葉剛氏と長野県立大学の草間かおる氏をマラウイに派遣
- 8月29日 【マラウイ】 ご寄付いただいた白衣等をムジンバ県保健局ならびにプロジェクト対象地域ヘルスセンターへ寄贈、贈呈式を開催
- 9月5日 【ラオス】 AINプログラム:第8回 VNV (2期生) フォローアップ研修を実施
- 9月11日～15日 【マラウイ】 NPO法人 Colorbathが企画運営する「アフリカ・マラウイ共和国へのフィールドワーク'19」に協力
- 9月8日～14日 【ラオス】 聖マリア学院大学のスタディツアーを受け入れ
- 9月12日・13日 【ラオス】 山陽女子短期大学のスタディツアーを受け入れ
- 9月28日 グローバルフェスタ JAPAN 2019 (お台場)にて外務省写真展表彰式に参加



入会と寄付の
お願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員 年会費：30,000円

一般会員 年会費：3,000円

【振込先】

郵便振込 口座名 特定非営利活動法人 ISAPH
口座番号 00180-6-279925

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、ISAPH事務局までご連絡いただければ幸いです。

—— 特定非営利活動法人 ISAPH ——

【福岡事務所】

〒813-0034
福岡県福岡市東区多の津4-5-13 スギヤマビル4階
TEL.092-621-8611

【東京事務所】

〒105-0004
東京都港区新橋3-5-2 新橋OWKビル3階
TEL.03-3593-0188 FAX.03-3593-0165

E-mail jimukyoku@isaph.jp

URL <http://isaph.jp/>

ISAPHの役員名簿

役職	氏名	備考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学 名誉教授
理事	浦部 大策	聖マリア病院国際事業部 部長
理事	江藤 秀顕	神山復生病院 医師
理事	渡部 和男	龍谷大学法学部 客員教授
理事	杉下 智彦	東京女子医科大学国際環境・熱帯医学講座 教授
監事	竹之下 義弘	東京六本木法律特許事務所 弁護士

【ISAPH ニュースレター 第34号 編集スタッフ】

石原 潤子 / 磯 東一郎 / 乳井 昌史

社会医療法人
雪の聖母会



聖マリア病院

理事長：井手 義雄 病院長：島 弘志

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322(代) FAX.0942-34-3115
URL <http://www.st-mary-med.or.jp>

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- 地域医療支援病院
- 福岡県救命救急センター
- 福岡県総合周産期母子医療センター
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院
- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 福岡県肝疾患専門医療機関
- 福岡県災害派遣医療チーム指定医療機関
- 福岡県第二種感染症指定医療機関
- 地域がん診療連携拠点病院
- 福岡県小児救急医療電話相談施設
- 福岡県児童虐待防止拠点病院
- 久留米広域小児救急医療支援施設
- 自動車事故対策機構 NASVA 療護施設
- ISO 9001 認証施設
- ISO 15189 認定施設
- 日本医療機能評価機構認定施設 (一般病院2 <3rdG: Ver. 1.1>)
- 日韓医療技術協力指定病院
- 久留米市病 (後) 児保育施設

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。